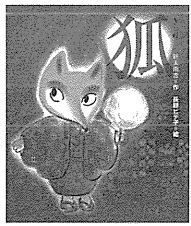
本棚の古典の散歩道

『ごんぎつね』新美南吉 作
黒井健 絵（偕成社 1986 年）



『狐』新美南吉 作
長野ヒデ子 絵（偕成社 1999 年）

「ごん狐」「狐」

新美南吉 作

評者 宍戸洋子
（元幼稚園・短大教員）

新美南吉の幼少年時代

「ごん狐」「手袋を買いに」の代表作で知られている新美南吉（本名・新美正八）は、一九一三（大正二）年、愛知県半田市岩滑（やなべ）で、畳職人の父・渡辺多蔵、母・りゑの次男として生まれた。長男はわずか生後十八日で亡くなっている。母・りゑは病弱で、南吉が四歳の時、二十八歳の若さで亡くなった。

南吉が五歳の時、父親は後妻を迎える。翌年弟が生まれると、南吉は生母の実家、新美家に養子に出される。ここは半田の村はずれで、周囲は田んぼばかり。祖父母もすでに亡くなり、生母の継母・新美志もが大きなかやぶきの家で一人で暮らしていた。血のつながりのない祖母との二人だけの生活の寂しさ、幼くして養子に出された心の痛手に耐えられなかった南吉は、わずか五か月足らずで、父親と継母と異母弟のいる岩滑に戻る。しかし、

宍戸洋子（ししどようこ）
半田市立幼稚園長、名古屋短期大学教授を経て、現在、
あいち保育研究所で保育の実態調査など研究活動を継続。

戸籍上は新美家の養子で、以後亡くなるまで、父親の渡辺姓ではなく新美の姓であった。

成績優秀だった南吉は、小学校の卒業式で答辞を読む。最後に「たんぽぽのいく日踏まれて今日の花」という俳句を入れ、参列者に感銘を与えた。当時、ほとんどの生徒が、小学校を卒業すると二年間の高等小学校に進んだ。五年間の旧制中学校へ進学するのは、ほんの一握りの富裕階級の家庭に限られていた。畳屋の職人の息子が中学校に進学することなど考えられない時代だった。しかし、小学校の先生たちの熱心な説得で、ようやく両親も中学校に進学することを認めることになる。

中学校に進学した南吉は、文学に興味を持ち、鈴木三重吉、北原白秋の主宰する雑誌『赤い鳥』をはじめ図書館の本をむさぼるように夢中で読み、その影響を受け、童話、童謡、詩、小説を書きためていく。そして、『赤い鳥』『コドモノクニ』『少年倶楽部』などの雑誌に精力的に、ペンネーム「南吉」の名で投稿する。やがて作品が掲載されるようになり、南吉は、自分の文学の才能に自信をつけていく。

一九三一年、成績優秀で中学校を卒業し、授業料免除の岡崎師範学校第二部を受験するが、身体検査で不合格。失意の南吉は、四月から八月まで母校の小学校の代用教員になる。このころの教え子たちは、南吉からたくさんの自作の童話を聞いた、と後に語っている。

東京外国語学校時代

北原白秋の門下生・巽聖歌（たつみせいか）は、『赤い鳥』をはじめ児童文学雑誌にたびたび投稿し、入選し掲載される若い南吉に早くから目を留めていた。氏の同人雑誌『チチノキ』に南吉が加入するのをきっかけに、聖歌は南吉に東京に来るよう勧める。そして、本格的に文学を学ぼうと志していた南吉は、聖歌の家に下宿し、東京外国語学校を受験し合

格。両親を説得し東京に出て行くことになった。一九三二年、東京外国語学校英語部文科に入学。この年『赤い鳥』一月号に「ごん狐」が載る。聖歌は南吉に、大正、昭和初期の童謡、童話、児童文学を築き上げた鈴木三重吉、北原白秋、与田準一、小川未明、坪田譲治らを紹介したり、東京を案内し、親身に世話をする。南吉も『チチノキ』の編集を手伝いながら、「手袋を買いに」「デンデンムシ」「大岡越前守」等を書き、東京の生活を謳歌していたが、一九三四年、一回目の喀血をする。一九三六年三月、成績は優秀だったが、軍事教練に出なかったため志望の中学教員になれず、神田小川町の雑貨貿易、商工会館に勤める。しかし十月、二度目の喀血をし、帰郷する。

帰郷、安城高女時代から亡くなるまで

東京での文学活動の夢破れ、帰郷せざるを得なかった南吉の悲しみはいかばかりだったか。しかしそれ以上に父親、継母の失望は大きかった。旧制中学校に行かせ、さらに東京の大学に進学させ、無理に無理を重ね、それでも南吉の将来に夢を託してきた。それが職を失い、それどころか病気で帰ってくるとは。

当時、結核は伝染性の強い病気として恐れられていた。今のように良い薬はなく、滋養をとり、ゆっくり休養をとることのみが唯一の方法だった。しかし南吉は、両親の嘆きの中で毎日、針のむしろに座っているような状態で、十分に体が回復していないのを知りながら就職活動を始める。

四月から河和小学校で代用教員に採用され、ひとときの幸せと安らぎを得るが、七月で終わりになる。九月から杉治商会で鶏のひなの世話をする仕事に就くが、月給は手取り十六円と安く、寮には冬、火鉢も無く体にこたえ、肉体的にも精神的にも経済的にも最も苦しい失意の二年間だった。

一九三八年四月、中学校の恩師の計らいで、安城高等女学校に勤務することになった。「父も母もあまりの喜びで、狂い出さねばいいと、そんな心配をした」と、南吉はその喜びを巽聖歌に手紙で書いている。月給七十円と経済的にも安定し、心にも余裕ができ、希望を胸に新生活を迎える。

生徒の英語と作文指導をしながら「良寛物語　手毬と鉢の子」「おじいさんのランプ」を出版し、ようやく世の中に注目され始める。しかし喜びもつかの間、一九四二年、腎臓が悪くなり血尿が出る。死を意識し始めた南吉は、「牛をつないだ椿の木」「花のき村と盗人たち」「狐」等次々に書き上げる。一九四三年二月、人生で南吉が最も安定し、楽しく輝いていた安城高等女学校を退職。死を覚悟して、手もとにある未発表の作品を遺書とともに巽聖歌に送る。三月二十二日、永眠。二十九歳八か月の若さだった。

作品に流れる母への想い

短い南吉の生涯であったが、この中で、童話約百編、小説三十五編のほか、詩、童謡、俳句、短歌の作品がたくさんある。

いちばん母親が恋しい幼児期に母を亡くし、さらに養子に出された寂しさ、つらさ、悲しさ、やるせなさ、母親を慕う南吉の気持ちが、南吉の全作品の根底に流れている。その中で、今回は、狐の登場する「ごん狐」と「狐」を取り上げてみる。

「ごん狐」では、兵十が病気の母親のために苦労してとったウナギを、狐のごんがいたずらをして取ってしまう。その母親が死んで、兵十はごんと同じように独りぼっちになってしまう。罪を償うため、ごんは、栗や木の実を兵十の家にこっそり届ける。しかし、兵十にはごんの気持ちが通じず、鉄砲でごんを撃ってしまう。その時、土間に置かれた栗が兵

十の目に留まる。「ごん狐」の最後はこう結ばれている。『「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は、火縄銃をぱたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。』

幼くして母と死別し、養子に出された南吉と兵十、狐のごんには、共通の孤独感があり、まさに一心同体になっている。お互いを理解しようとしながら、どこかすれ違ってしまう不条理さが伝わってくる。

「狐」はあまり知られていないが、南吉の最晩年の作品、なぜか私の心をとらえて離さない。その内容は……

月夜に七人の子どもが、半里ばかり離れた村へ、夜のお祭りを見に急いで歩いていたが、やせっぽちで色の白い、一人っ子で甘えん坊の文六ちゃんが、大きい母親の下駄を履いていて遅れてしまう。文六ちゃんのお母さんから文六ちゃんの下駄を買うよう子どもたちは頼まれていたので、道端の下駄屋に入り新しい下駄を買った。その時、腰の曲がったおばあさんが「晩げに新しい下駄をおろすと狐がつくというだに」と言いながら入ってきた。子どもたちは「嘘だい、そんなこと」「迷信だ」と否定したが気になって、お祭りも十分楽しめなかった。帰りも月夜だったが、誰もしゃべらなかった。黙々と歩いていたその時、文六ちゃんが「コン」と咳をした。子どもたちは、文六ちゃんが狐になってしまったと恐ろしくなった。そして、いつもは甘えん坊の文六ちゃんを家まで送っていくのに、みんなさっさと自分の家へ逃げるように帰ってしまった。いつもと違う友達の様子に心配になった文六ちゃんは、お母さんに「もし、僕が、ほんとに狐になっちゃったらどうする?」と聞く。「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かわいい文六が、狐になってしまったから、わ

したちもこの世に何のたのしみもなくなってしまったで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」……「そんなことをしているうちに、犬がすぐうしろに来たら?」「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましょう」「どうして?」「犬は母ちゃんに噛みつくでしょう、そのうちに猟師が来て、母ちゃんをしばってゆくでしょう。その間に、坊やとお父ちゃんは逃げてしまうのだよ」「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしになってしまうじゃないか」『文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどっと流れて来ました。お母さんも、ねまきのそでこっそり眼のふちをふきました、そして文六ちゃんがはねとばした、小さい枕を拾って、あたまの下にあてがってやりました。』と終わる。

この「狐」は、死期が近づいていることを感じながら書かれた作品である。初期のころ書かれた「ごん狐」「手袋を買いに」と同様に母の愛というテーマが一貫して流れている。

おわりに、南吉の母親への想いをつづった詩を紹介する。

天国

新美南吉

おかあさんたちは　みんな一つの、天国をもっています。どのおかあさんも　どのおかあさんももっています。それはやさしい背中です。どのおかあさんの背中でも　赤ちゃんが眠ったことがありました。背中はあっちこっちにゆれました。子どもたちは　おかあさんの背中を　ほんとの天国だとおもっていました。おかあさんたちは　みんな一つの、天国をもっています。

参考文献

1　巽聖歌『新美南吉の手紙と生涯』英宝社　一九六二年
2　新美南吉全集編集委員『校定新美南吉全集』第一～十二巻・別巻　大日本図書　一九八〇～八三年